

令和８年度 第３回あさお福祉計画及び地域包括ケアシステム推進会議 摘録

１．日時：令和８年９月２５日（金）１３時００分～１４時５５分

２．開催場所：麻生区役所 第２会議室

３．出席者

（１）委員

吉松委員長、森副委員長、村井委員、高橋委員、岡部委員、玉野委員、平井委員、佐野委員、依田委員、小林委員、植木委員

欠席 吉垣委員

（２）事務局

藤原所長、大塚地域みまもり支援センター副所長、雨宮地域ケア推進課長、池田地域ケア推進課課長補佐、麻生地域ケア推進課主任、荒井地域ケア推進課職員

（オンラインによる参加）

梅澤地域支援課長、大場児童家庭課長、江口衛生課長、上野保育所等・地域連携担当係長、横田危機管理担当係長、川口企画課担当係長、宮島生涯学習支援担当課長

４．次第

１ 開会

地域みまもり支援センター所長挨拶

２ 議事

（１）第８期麻生区地域福祉計画の策定について

①第８期麻生区地域福祉計画（案）について 資料 １

②今後の地域福祉計画策定スケジュールについて 資料 ２

（２）麻生区地域福祉計画独自ツール（啓発パンフレット）の企画（案）について 資料 ３

（３）その他

「ＡＩはシニアの味方、活用ガイド展」報告

「人生１００年時代をポジティブに」

公募委員の募集について

３ 閉会

【配布資料】

委員名簿

座席表

あさお福祉計画及び地域包括ケアシステム推進会議開催運営等要綱

資料１ 第８期麻生区地域福祉計画（案）

資料２ 今後の地域福祉計画策定スケジュール

資料３ 麻生区地域福祉計画独自ツール（啓発パンフレット）の企画（案）

参考資料 ＡＩはシニアの味方、活用ガイド展

参考資料 人生１００年時代をポジティブに（１０、１１月）

５．公開・非公開の別

公開

6. 傍聴者

0名

7. 議事摘録

1 開会

2 議事

(1) -① 第8期麻生区地域福祉計画（案）について資料1を基に事務局より説明。

(意見交換)

依田委員 まず全体として、用語が統一されており、11 ページでは環境を整備し、人の気持ちも育みながら、最終的にネットワークの行き届いたまちにしていこうという方向性が具体的に示されています。どれも一斉に取り組まなければならないことではありますが、このように書いていただけると、目指す方向が明確になり、はっきりした気持ちで目標を立てやすくなったと感じながら説明を伺いました。全体的に大賛成で、前回より格段に分かりやすくなり、大変うれしく思っています。本当にご努力いただき、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。1点、2点申し上げますと、まず実感指標はとても良いと思いました。活動指標だけでは成果が見えにくく、「なぜこれを頑張ったら成果が上がったと言えるのだろうか」と疑問に感じることもありましたので、その点、実感指標は分かりやすく、大変良い指標だと思います。そこで9ページについてです。活動指標として「麻生区見守りネットワーク事業における協力事業者数」が設定されていますが、私の不勉強かもしれませんが、この指標はどの程度効果があるのでしょうか。形としては良いと思えますし、協力事業者数を増やすという考え方自体は良いと思えます。ただ、これを中心的な指標とすることについては少し疑問があります。事業者が増えることが見守りの効果にどの程度つながるのかという点について、これまでの報告を聞く中でも考えてきましたが、もっと有効な指標があるのではないかと考えています。次に、10 ページ下段についてです。第8期麻生区地域福祉計画の方向性として、どのような姿勢で計画を進めていくのかが明確に示されており、とても良いと思えます。しかし、一文目に「一人ひとりの行動や意識の変化につながるよう」と書かれていますが、地域福祉の担い手はなにも個人だけではないと思えます。団体や法人、企業などの社会資源も、この計画に主体的に参画していくことが必要ではないでしょうか。川崎市の次期計画では、民間企業や団体などの資源へのアプローチが強く示されていたように記憶していますので、ここに団体や組織の行動変容についても盛り込んでいけばよいのではないかと考えています。次に、11 ページの基本方針3についてです。人・もの・場をつなぐ地域づくりということで、認知症への取組が位置付けられていることはとても良いと思いますが、もう一つの課題として、麻生区では「地域の足」も重要な課題だと認識しています。社会参加を進めるためには移動手段が不可欠ですので、地域の足に関する取組についても、計画に何らかの形で盛り込んでいただきたいと要望します。最後に、16 ページ中央の「区域の視点から」についてです。これまで私が地域ケア圏域について申し上げてきましたので、このように枠組みを持って書いていただいたことに感謝いたします。さまざまなエリアサイズが存在し、それが地域福祉を進める上でのまとまりにくさや調整の難しさにつながっているという現状認識まで書いていただいたことも、ありがたく読ませていただきました。ただ、説明を伺うと、下の黒丸の部分については、

規模の違いが現実にあるものの、福祉にはさまざまな大きさのエリアがあつてよく、それぞれを生かしながら取り組んでいきたいと思います。やや現状維持に近い内容に聞こえました。私としては少し残念に感じています。課題があるのであれば、それを解決するために工夫や応用を重ねながら取り組んでいくことが必要ですし、その先につながる形で、さらに活動しやすくなる環境整備の方向性が見える記載を検討していただきたいと思います。

事務局

9 ページの重点項目についてですが、これは第7期の今期計画で設定している指標となります。ご指摘のとおり、協力事業者数を増やすこと自体が目的ではなく、それが実際の見守りにつながっているのか、前回の会議でセンサーとアンカーの話もありましたが、協力事業者が見守りの意識を持って活動できているのかといった点については、今後も確認していく必要があると考えています。10 ページについては、ご指摘のとおり、「一人ひとり」だけではなく、組織や企業なども含めた主体の行動や意識の変化につながるような表現を加えられないか検討したいと考えています。11 ページの「地域の足」の問題については、事務局としても非常に悩ましいところで、地域ごとに問題意識や状況が大きく異なるため、計画上どのように位置付けるべきか難しいと感じています。現時点では、基本方針3の「つながりを育む地域づくり」の中で、身近な地域での連携を通じて足の問題を考えていくことを想定しています。実際に片平地域ではコミュニティ交通の取組が始まっており、百合ヶ丘地区でも長年にわたり同様の取組が行われています。また、金井原苑の車両を活用したサロン送迎など、地域ごとにさまざまな試みが行われています。一方で、運転ボランティアの担い手不足やコミュニティ交通の利用者数の課題などもあり、必ずしも順調に進んでいる事例ばかりではありません。地域の足の問題については、今後も重要な課題として認識しており、繰り返しになりますが、今回は基本方針3の中に位置付けています。16 ページの「区域の視点」についてですが、ご指摘のように、もう一步踏み込んだ方向性を示せないかという点は、事務局としても課題意識を持っています。ただ、地域福祉の取組には、それぞれ適切な範囲や単位があり、一律の解決策を示すことは難しいと考えているところです。実際に、どのような範囲で、どのような主体が関わると課題解決につながるのかについては、まだ十分に整理しきれていません。先日、村井先生から横浜市の地域ケアプラザの拠点のお話がありましたが、麻生区には同様の施設がないため、麻生区にある地域資源を生かしながら、それらをどのように連携・活用し、地域福祉を進めていくのかについて検討していく必要があります。このテーマは、まさに地域福祉計画の肝となる部分ですので、事務局が答えを出すのではなく、委員の皆さまからもお知恵をいただきながら、検討を進めていきたいと考えています。

依田委員

ありがとうございます。11 ページの地域の足の問題についてですが、先ほどの説明を伺うと、コミュニティ交通やボランティアによる移送支援が事例として挙げられていたと思います。今年の秋には千代ヶ丘でデマンド交通やモビリティハブの実証実験が始まると聞いています。これは川崎市のまちづくり局から持ち込まれた話ですが、私たちも片平のかきまる号の活動に関わる中で感じているのは、コミュニティ交通だけでは、移動困難を抱える全ての方を支えることは難しいということです。さ

さまざまな交通手段や移動支援の仕組みが連動しながら機能するまちづくりが必要だと思っています。現在もコミュニティ交通やボランティアによる支援は細々と続けられていますが、新たな方法を検討していく方向性が計画の中で示されるとよいのではないのでしょうか。今ある仕組みだけで進めていくのには限界があります。地域福祉を進めるためには学びも必要ですので、学びの機会をつくった方がよいと思いますし、せめて「地域の足」が課題であるということを計画のどこかに見える形で書いていただければ、この計画を見た人たちが「地域の足の問題を区も課題として認識している、それでは私たちに何ができるだろう」と考えるきっかけになります。ぜひ何らかの形で盛り込んでいただきたいと思います。また、最後の16ページの「区域の視点」についてですが、私も皆さまの意見を伺いたいところです。先ほど、横浜市では地域の拠点を中心としたエリア活動が行われているというお話がありました。川崎市には同様の仕組みがないとのことでしたが、全ての機能を備えていなくても、例えば既存の「いこいの家」を地域の拠点として位置付けることはできるのではないのでしょうか。高齢者だけの施設ではなく、地域全体のコミュニティ拠点として活用していくという考え方です。そして、拠点が不足している地域については、どうすれば拠点をつくれるのかという問題意識を投げかけていただければ、例えば空き家の活用や企業の空きスペース、倉庫を借りるなどの方法も考えられます。地域の方々と話していると、さまざまな可能性が見えてきます。もちろん、一度に全てを整備することは難しいと思いますが、「この地域には拠点が足りない」という課題が共有されれば動き出すことができるのではないのでしょうか。そういう意味では、書けないから書かないのはもったいないと思います。課題として示していただくことに意味があります。地域ごとに拠点があり、エリアがあり、人と人が顔の見える関係の中で集う。そうした仕組みを川崎市でも進めていくべきだと考えています。ぜひ、その方向性を計画の中に盛り込んでいただきたいと思います。

佐野委員 第7期の表現と比べると、かなり具体的で、取組へのハードルが下がり、理解しやすくなっているように感じました。とても良いことだと思います。地域福祉を自分事として捉えてもらうことが、この計画の最終目標であり、最も難しい部分でもあると思います。また、区域の考え方についてですが、町会・自治会や民生委員児童委員協議会、中学校区、小学校区など、さまざまな単位があります。しかし、現在の町会・自治会の加入率は約60%と伺っており、40%の方は加入していません。小学校区や中学校区についても、子どもが卒業すると関わりがなくなります。また、家族の中に支援が必要な方がいても、地域包括支援センターなどにつながっていれば相談先がありますが、どこにもつながっていない家庭もあると思います。それほど困りごとがない方に対して、いかに地域福祉を自分事として捉えてもらうかは、とても難しい課題だと考えています。計画には、さまざまな媒体や既存の組織を通じて周知していきましようと思いますが、地域にはラジオ体操をしているグループ、ウォーキング活動、おしゃべりの場など、組織化されていない小さな集まりも数多くあります。こうした集まりに対して、今後作成される啓発パンフレットのような簡単な資料を配布できる仕組みがあるとよいのではないのでしょうか。個人に向けてだけでなく、面的に広がりのある活動や集まりに対して配布できれば、その輪がさらに広がり、空白地域も少なくなっていくと思います。まずは、そうした活動や集まりに関する情報を集め、

「こういう活動をしている人たちがいるのであれば、そこにパンフレットを置いていきましょう」という形で広げていくことが大切ではないかと思います。その中で、地域福祉を知ってもらうことが意識づくりにつながるのではないのでしょうか。また、人は自分自身の生活が安定しているからこそ、周囲の人にも目を向けられるのだと思います。まずは一人ひとりが自分らしい暮らしを続けられていること、そしてその上で隣近所の方に少し目を向けてもらうことが大切だと感じています。その意味では、「まずは自分らしく暮らしていきましょう」という、みんなに共通する課題から地域福祉を伝えていくことも一つの方法ではないかと思いました。また、第8期計画は全体的に言葉遣いが柔らかくなり、第7期と比べても身近に感じてもらえる表現になっていると思います。その点についても評価したいと思います。

小林委員 資料を拝見し、私も皆さんと同様に、全体として非常によくまとまっており、言葉の整理もされていて、とても見やすくなったと感じています。個人的な意見になりますが、これまで理念として掲げられてきた「みんなで支え合う福祉のまち麻生」が、11ページではスローガンとして残されているものの、以前に比べると少し目立たなくなり、寂しい印象を受けました。ページの下部に記載されていることもあり、もう少し主張してもよいのではないかと考えています。私たち社会福祉協議会の活動計画においても、「みんなで支え合うまち麻生」をスローガンとして前面に掲げる方向で考えていますので、計画の中でも、もう少し強調できるのであれば、お互いで同じ理念を掲げていることが分かりやすくなると思います。要望というほどではありませんが、もう少し目立つ形で表現していただければ、と感じました。また、今回の計画ではイラストを活用し、分かりやすく工夫されていると感じています。一方で、第7期計画では地域活動の様子などの写真も掲載されていましたが、今回は写真を掲載しない方針なののでしょうか。あえて写真を掲載していないのであれば、そのあたりの状況について教えていただければと思いました。

植木委員 基本的なことですが、3ページの「区の概況」において、「麻生区は平均寿命が日本一となった一方で、高齢化の進展が見込まれることから、今後も健康で安心して暮らし続けられる地域づくりが求められています」と記載されています。その点について、今回の計画の中で具体的にどのように表現されているのかが見えにくく、少し残念に感じました。日本では100歳以上の方が10万人を超える状況となっていますが、その中で麻生区の特徴は平均寿命が日本一であることです。そういった意味でも、麻生区らしい取組や情報発信を、今回の計画の中にもう少し具体的に盛り込んでよいのではないかと考えています。後ほど報告しますが、私はこれまで3年間にわたり、「人生100年時代」をテーマとした講座を続けてきました。毎年、多くの区民の方に参加していただき、健康に、生きがいを持って暮らしていくことへの関心の高さを実感しています。私自身が主催することはそろそろ一区切りにしたいと考えておりますが、こうした講座や啓発活動についても、麻生区らしい取組の一つとして計画の中にぜひ位置付けていただければと思います。これまでの活動経験を踏まえた意見として、ご検討いただければと思います。

玉野委員 計画全体の内容については、非常に分かりやすく整理されているというのが率直な感想です。また、認知症に関するキーワードも多く見受けられ、その点は大変良いと

思いました。私自身、今年 RUNTOMO に参加していますが、現在、川崎市では 65 歳以上の高齢者について、軽度認知障害（MCI）を含めると 3.5 人に 1 人が認知症になるといわれており、具体的な数字も示されています。認知症というと、自分には関係のない遠い話として受け止められがちですが、これだけ多くの方が将来的に認知症になる可能性があることを考えると、そうした状況がもう少し具体的に計画の中で示されることで、より現実的な課題として理解されるのではないかと感じました。また、最近特に課題になっているのが、セルフネグレクトと呼ばれる方々への対応です。誰かが助けを求めてくだされば気づいて支援につなげることができますが、一方で、誰にも助けを求めることなく、気が付いたときには深刻な状況になっている方も少なくありません。そうした方々をどのように支えていくのか、また、どのように情報を届けていくのかという視点が、計画の中にもう少し盛り込まれるとよいのではないかと感じています。さらに、情報発信の手段についても課題を感じています。これまで活用してきた小学校や中学校を通じたチラシの配布については、先生方の負担や学校現場の業務多忙化、デジタル化の進展などもあり、配布を断られる場面が増えてきています。今後は、従来の方法だけでなく、新たな情報発信の手法についても検討していかなければならない時期に来ているのではないかと感じています。

平井委員 新しい計画を拝見し、皆さんがおっしゃるように、分かりやすく可視化されているというのが第一印象です。実態調査から見えた課題として、地域活動に参加したことがない人が 35%いることや市の広報が情報の入手先として選ばれにくくなっていることなど、具体的な課題が整理されており、区民アンケート調査の結果を踏まえながら課題を明確にし、それを計画に反映していることがよく伝わる内容になっていると感じました。また、先ほども話題にありましたが、麻生区は令和 2 年に平均寿命日本一となり、その後、「日本一その先へ」という考え方のもとで取組を進めてきて、その中で重視されていたのが、幸せの実感だったと思います。今回の第 8 期計画で掲げられている実感指標は、そうした考え方にもつながるものではないかと認識しております。その関連性がどこかで示されると、なぜ実感指標を設定したのかという意図がより伝わりやすくなると思います。また、11 ページの「みんなで支え合う福祉のまち麻生」という理念についてですが、この計画は、まさにこの理念をどのように実現していくのかを具体的に示した内容になっていると思います。そのため、「みんなで支え合う福祉のまち麻生」という理念は、11 ページの後段に配置するのではなく、計画の冒頭やより目立つ位置に示した方が、計画全体の方向性や目指す姿が区民にも伝わりやすくなるのではないかと感じました。

岡部委員 皆さんがおっしゃっているように、計画全体が非常に読みやすく、分かりやすくなったと感じています。その上で、細かい点になりますが、まず 3 ページの「区の概況」についてです。掲載されている数値は、現状を把握するうえで重要なデータだと思いますが、この数字をどのように読み取ればよいのかが少し分かりにくいと感じました。例えば、高齢化率 25.2%という数字がありますが、この数値が全国や川崎市全体と比べてどのような位置づけにあるのかが分かりません。私が調べた範囲では、全国の高齢化率は約 29.1%ですので、麻生区はそれよりも 4 ポイントほど低い状況にあります。一方で、麻生区は長寿日本一です。このギャップの背景には、比較的若い

世代の流入なども関係しているのではないかと思います。この数値について、川崎市平均や全国平均との差などが併せて示されると、麻生区の特徴や課題をより分かりやすく理解できるのではないかと感じました。次に、先ほど玉野委員からもご指摘がありましたが、今回の計画では認知症が重要なテーマとして位置付けられており、それ自体は大変重要なことだと思います。ただ、認知症の問題がどの程度なのかという量的な情報があると、より問題意識を持ちやすくなるのではないかと感じました。実際にどれくらいの方が対象となるのか、どの程度の影響があるのかが分かると、課題の大きさをより実感できると思います。また、一人暮らし高齢者の問題についても触れたいと思います。6 ページのひとり暮らし高齢者の推移を見ると、今後、一人暮らし高齢者が増加していくことが読み取れます。実際には、周囲に気付かれないまま問題が深刻化してしまうケースも少なくありません。私は、この数値の変化そのものが非常に大きな課題だと感じています。そのため、ひとり暮らし高齢者の増加という課題との関連も含めて、もう少しクローズアップしてもよいのではないかと思います。

高橋委員 7 ページの実態調査のアンケート「川崎市地域福祉計画を何で知りましたか」の結果で、「地域福祉計画を知らない」と回答した方が 74.8%、約 4 人に 3 人にのぼったという結果についてですが、私は地域で活動している立場から見ても、回覧などでも目にする機会が少ないため、とても現実的な数字だと感じました。普段の地域活動の中でも、地域福祉計画について話題になる機会はあまりありません。先ほど依田委員から、いこいの家の話があがりましたが、実際に地域でさまざまな方とお話をしていても、いこいの家を利用している方は知っていても、一般の高齢者の方々にはほとんど知られていないのが実情ではないかと思います。私自身、先日の敬老の日に 70 歳以上の方々を訪問する機会があり、180 世帯のうち 55 世帯ほどを訪問しました。実際にお会いしてみると、多くの方がお元気に生活されており、70 代、80 代になっても積極的に活動されている方がたくさんいらっしゃいました。また、私の地域では老人福祉センターを利用されている方も多く、毎年夏頃には講座案内などのパンフレットが配布されています。老人福祉センターには麻生区内の各地域から利用者がバスなどを利用して集まっており、地域の重要な交流の場となっています。また、老人いこいの家についても、さまざまな部屋があり、太極拳や囲碁をはじめとした多様な活動やサークルが行われており、地域の居場所として大切な役割を担っています。交通手段の課題はありますが、上り坂の一区間だけバスを利用し、帰りは歩いて帰るなど、高齢の方々が工夫しながら利用されている様子も見受けられます。また、川崎市や区、社会福祉協議会などからの回覧物や配布資料は非常に多く、現在も定期的にさまざまな広報資料が届けられています。配布する側にとっても、暑い時期などは負担が大きく、アートセンターや地区社会福祉協議会など、多くの団体からの配布物を取り扱っている状況です。そのような中で、地域福祉計画があまり知られていない現状を考えると、老人いこいの家や老人福祉センターなど、多くの高齢者が利用する場所に、「地域福祉計画をご存じですか」といった形で簡単なチラシや案内を置いていただくことも一つの方法ではないかと思います。多くの方の目に触れる場所に置くことで、まずは計画の存在を知っていただくきっかけになりますし、地域福祉への関心を持っていただく入口にもなるのではないかと感じました。

森委員

これまでお示しいただいた計画の中では、今回の計画が一番分かりやすく、とても良くなったというのが率直な感想です。民生委員の視点から、何点かお話しさせていただきます。まず、5ページの地域ケア圏域の概況についてです。私どもは、麻生東第3地区の百合丘・東百合丘地区において、14名の民生委員で活動しています。最後の一文にある「若い世代を含めた住民同士の交流が育まれています」という記載については、まさにそのとおりだと実感しています。地域では高齢化が進んでいる一方で、新しいマンションや住宅も増え、若い世代の転入も続いています。また、お祭りも盛んで、盆踊りやフリーマーケットなどには若い世代の方々が主体的に開催するようになり、世代を超えた交流は着実に進んでいると感じています。次に、12ページの民生委員の役割についてです。「地域住民の身近な相談役として、高齢者や子育て世代をはじめ、支援を必要とする人々の見守りや相談に応じ、必要な支援やサービスにつなぐ橋渡しを担います」と記載されていますが、実際の活動の中で最も大きな比重を占めているのは見守り活動です。年に1回、75歳以上の方を対象とした市の生活調査があります。以前は民生委員が直接訪問していましたが、コロナ禍以降は行政から対象者へ直接調査票が送付され、未回答の方について民生委員が訪問する形をとっています。その中で感じるのは、対象者リストから漏れてしまう、いわば狭間の方がいるということです。例えば、それまで夫婦で暮らしていた世帯で、一方が亡くなり独居となった場合、本来であれば見守り対象として把握されるべきですが、リストに反映されていないケースがみられます。以前から関わっている民生委員であれば気付くことができますが、訪問する機会がなければ把握できず、「そうだったのですか」と後から知ることも何度かありました。そのため、対象者の把握については、区や市においても、より丁寧な確認をお願いしたいと思います。また、麻生東地区社会福祉協議会が支援している会食会や配食事業があります。民生委員は、会食会への付き添いやお手伝い、配食時の訪問などを通じて対象者と直接顔を合わせることができます。これは安否確認だけでなく、近況を把握する上でも非常に有効な機会になっています。こうした事業は見守り活動にとっても大切なツールですので、今後も継続して支援していただきたいと思います。また、地域情報交換会についてですが、各地区で年度に1回実施されています。ただ、これまでの印象としては、意見を出して終わり、話を聞いて終わりになってしまうこともあったように感じています。課題が見つかったのであれば、その後どのようにブラッシュアップしていくのか、改めて検討の場を設けるのかなど、もう少し効果的な場になるとよいと思います。さらに、認知症についてです。計画の中でも大きく取り上げられていますが、「地域で見守りましょう」と言われても、症状や状況は人によって大きく異なるため、地域だけで支えることには限界があると感じています。私自身も、非常に対応が難しい事例を経験しました。最初はどうか対応したらよいのか分からず、本当に困っていましたが、地域包括支援センターや障害分野の相談機関につながり、状況が落ち着きました。その経験からも、認知症や複合的な課題を抱えるケースについては、地域だけで対応するのではなく、地域包括支援センターや障害の相談機関へ早い段階でつなぐことも非常に重要だと感じています。感想が中心となりましたが、以上となります。

事務局

皆様からさまざまなご意見を伺う中で、一つお詫び申し上げなければならないと感じています。前期の第7期計画は100ページを超える内容でしたが、今回は16ペー

ジという限られたページ数で作成することとなっています。委員の皆様は日頃から地域で多様な活動に取り組まれており、本日も多くの貴重なご意見をいただきました。本来であれば、そうしたご意見や地域の実情をできるだけ多く計画に盛り込みたいという思いがありますし、写真を掲載したり、より親しみやすく分かりやすい表現にしたりするなど、工夫したいことも数多くあります。しかし今回は、市計画と区計画を合冊するという方針のもと、16 ページという制約の中で計画をまとめることとなりました。そのため、限られた紙面の中で、皆様からいただいたご意見をどのように反映できるかを事務局として検討しながら作業を進めてきたところです。この後、村井先生からもさまざまなご意見やご助言をいただけたと思いますが、こうした制約も踏まえながら計画をご覧いただければ幸いです。

村井委員 ページごとに確認します。まず3 ページについてです。先ほどもご意見がありましたが、「数字で見る区の概況」の数値には相対性がありますので、どこと比べてどうなのかという説明があると、より分かりやすくなると思います。例えば、人口や世帯数、1 世帯当たりの人数が、どのような課題や強みを表しているのか、高齢化率や障害者の割合が他の地域と比較して多いのか少ないのかといった補足があると、麻生区の特徴が客観的に見えてきて分かりやすいと思います。高齢化率についても、全国平均などと比較すると決して高いわけではありませんので、そのことも含めて、麻生区の強みや弱みが見えるようになるとよいと思います。次に、4～5 ページについてです。地域福祉を地域ケア圏域で考える意義について、もう少し説明があるとよいと思います。なぜ圏域なのかということを説明しないと、圏域で取り組む意味がなかなか伝わりません。麻生区全体で見ると 17 万人を超える人口があり、その規模を一つの地域として捉えるのは無理な面があります。そのため、生活圏に近い単位として、より小さな区域という考え方が出てくるのだと思います。ただし、圏域にも限界があります。圏域でできることがある一方で、それだけでは対応できないこともあります。その場合は、町会・自治会、さらに近隣同士のつながりへと展開していくことになります。つまり、地域には階層があるということです。近所同士のつながり、班や組といった単位、自治会・町内会、小学校区、中学校区というように、それぞれ異なる範囲があります。今回の圏域という考え方は、中学校区程度の単位に近いものだと思います。このような地域の構造があり、それぞれの範囲ごとに担えることや活動内容が異なることを示すことが大切だと思います。個別支援から中間支援、さらに政策レベルまでの層があり、それぞれの役割が積み重なっていることが分かると、圏域の位置付けも理解しやすくなると思います。続いて、6～7 ページのグラフについてです。将来推計を示していただいていることは大変ありがたいのですが、できれば計画終了時点の推計値も掲載されるとよいと思います。計画というのは未来に向けたものですので、3 年後の麻生区がどのような状況になっているのかを見据えて、その状況に対応できるように取組を進めていくという視点が重要です。将来推計があることで、強みはさらに伸ばし、弱みに対しては対策を講じるという計画の方向性が、より分かりやすくなると思います。また、実感指標については、文句なく素晴らしいと思います。ただ、地域福祉を知っているか知らないかだけでは十分ではありません。知った上で、実際の参画や行動変容につながるかどうか重要です。そのため、一人ひとりが計画を読んだ上で、日々の生活の中でどのような小さな変化を起こせるの

か、自分なりの決意やメッセージを考えたり、書き留めたりできるワークシートのようなものがあるとよいと思います。例えば、麻生区民として何ができるのか、どのようなことを心掛けるのかを言葉にする機会があるだけでも違うと思います。長寿日本一の取組の中で行われている決意表明やメッセージに近いものがあると、地域福祉をより自分事として捉えやすくなるのではないのでしょうか。次に8ページです。地域のつながりをどのように客観的に把握するのかという点は、一つの課題だと感じています。国際的には「つながり指標」といった考え方もありますが、実施には大規模な調査が必要となり、調査結果をどのように施策へ活用していくかという課題もあります。費用対効果の面から簡単ではありませんが、地域のつながりや支え合いを区民がどの程度実感しているのかについては、今後、どこかの時期で客観的に把握できる調査を検討していく必要があるのではないかと考えています。続いて10ページです。委員の意見を吹き出しで整理していただいているのですが、非常によい整理になっていると思います。せっかく掲載するのであれば、その意見がどの基本目標に反映されているのか、何ページに関連しているのかが分かるようになるとさらに良いと思います。例えば、この意見は13ページに反映されている、この意見は基本目標1に反映されているというような関係性が分かれば、意見を集めただけではなく、計画に組み込まれているということが伝わりやすくなります。11ページについても同様です。限られたページ数の中で大変努力の跡が入っているのですが、基本方針の下に示されている関連する基本目標が入っていますが、具体的にどのページで説明されているのかが分かると、さらに理解しやすく、計画のつながりが見えてくるとと思います。12ページについてです。「麻生区民」という定義ですが、「麻生区民とは」や「地域福祉計画で位置付ける麻生区民の構成要素」というニュアンスが必要だと思います。麻生区民だけでは、少し分かりづらい印象を受けました。地域福祉計画における主体として示しているのであれば、「地域住民」「町会・自治会」「民生委員児童委員」といった主体がもう少し目立つような見せ方があるとよいと思います。それぞれの見出しが少し淡く見えるので、背景色やデザインなどで強調できるとより分かりやすくなると思いました。続いて13ページ以降の内容についてです。右側に事業例を掲載している点は、とても分かりやすく良い工夫だと感じました。一方で、さらに詳しく知りたいと思った方が情報を得られるような導線があると、より効果的ではないかと思います。例えば、二次元コードを掲載してホームページへ誘導するなど、紙媒体とデジタル媒体を連携させる仕組みがあるとよいのではないのでしょうか。事業の詳細な内容や活動状況、参加方法などをポータルサイト等に掲載できれば、計画本文はコンパクトなままでも必要な情報を補完することができます。また、活動紹介動画なども掲載できれば、「動画で見る麻生区の地域活動」のような形で、地域活動の魅力や具体的なイメージがより伝わりやすくなると思います。興味を持った方が、そのまま活動への参加や問い合わせにつながるような双方向の仕組みについても、ぜひ検討していただければと思います。15ページの下です。認知症に優しいまちに関する指標として、「認知症の人と喜びや楽しみを分かち合えるまちだと思う」が52.4%となっています。ただ、この数値の見せ方によっては、「そう思わない人がかなりいる」と読めてしまいます。実際には「分からない」という人も含まれている可能性があります。そのまま受け取ると、排除の構造があるまちであるようにも読め

てしまう危険があります。むしろ知りたいのは、「そう思わない」と回答した方の心理的背景ではないでしょうか。なぜそう感じるのか、そう思わないと答えた方のアイスブレイク、その心理的な壁をどう解消していくのかが今後の課題になると思います。16 ページについてです。個人的な意見ですが、委員名簿の中で吉松先生に「委員長」の表記があるとよいと思いました。長年委員長を務めていただいていますので、注記などで示していただければうれしいです。最後になりますが、先ほど申し上げたワークシートについては、ぜひ開発を検討していただきたいと思います。町会・自治会向け、地区社会福祉協議会向け、個人向けなど、それぞれの立場に応じた地域福祉計画のワークシートがあるとよいと思います。例えば、「この基本目標に対して自分たちには何ができるか」「地域のためにどのような取組ができるか」といったことを書き込めるシートです。計画と自分たちの活動との関係性を可視化できるツールとして機能すれば、計画をより身近に感じられると思います。こうしたワークシートは、必ずしも計画書本体に掲載する必要はなく、ホームページからダウンロードできる形でよいと思います。また、地域説明会や町会・自治会向け説明会などで活用することも考えられます。できればワークシートに記入した内容を、町会や自治会の事業計画に反映して頂くことができれば、この計画を「行政の計画」ではなく、「自分たちの計画」として捉えるきっかけになるのではないのでしょうか。ワークシートの種類についても、12 ページに示されている主体ごとに作成することも考えられます。それぞれが地域福祉計画をどのように受け止め、自分たちは何ができるのか、また行政に何を期待するのかを明確化できるツールとして活用できると思います。例えば、「麻生区としては基本目標 1 をこのように考えている」「自治会としてはこれに対してこう取り組む」といった内容を書き出すだけでも、計画は格段に自分事になっていくと思います。このような仕組みがあることで、地域福祉への理解や実感が深まり、参加意識の向上にもつながるのではないかと思います。以上が全体を通しての意見です。ありがとうございました。

依田委員 質問ですが、今、せっかくワークシートという形で、一步踏み込んで計画を自分事にしていく作業を促そうというお話がありましたが、それは本当に道筋としてありと思いますが、この計画の最後のページに、啓発冊子を作成していくことが記載されています。現在、ワーキンググループで、この会議終了後に何人かの委員で内容を検討しているところですが、たとえば、それと連携させていくようなことは考えられるのでしょうか。

村井委員 問題はないと思いますが、計画冊子が実際に誰に届くのかという点を考えると、配布先によってはワークシートの活用にも限界があると思います。そのため、ポータルサイトなどで示していく方法もあり、冊子とウェブの双方を活用しながら展開していく形が望ましいように感じています。

依田委員 もう一つ可能性として思ったのですが、区社会福祉協議会の地域福祉活動計画は、まさに実践を担う計画のはずです。そうすると、この行政計画と何らかの形で連携していかないと、本来はおかしいのではないかと思います。そうした計画同士の連携のあり方について、みんなで共有していくことも必要なのではないかと思います。

村井委員 理想的な考え方だと思います。まず、地域福祉活動計画と呼ばれるものは、住民主体の地域福祉の実施計画です。社会福祉協議会の事業計画とよく誤解されますが、社会福祉協議会の事業計画とは別のものであり、住民主体の地域福祉をどのように進めていくのかを示す実施計画として、社会福祉法においても重要な位置付けをされています。もちろん、行政計画と全く同じものを作る必要はありませんし、行政計画に従わなければならないという関係でもありません。ただ、将来的には行政計画と地域福祉活動計画を一体的に策定し、推進していくようなモデルができると理想的だと思います。その場合、個別の小地域における実践や住民主体の活動の展開については、社会福祉協議会や地域の皆さんが担い、全体の方向性を示し、施策を総合的に取りまとめたりする部分については行政が責任をもって行政計画で担うという役割分担ができてくるのだと思います。実際、横浜市などでは地域福祉計画と地域福祉活動計画を一体的に策定している事例があります。全国的にも、そのような取組は少しずつ増えてきています。一方で、行政計画と地域福祉活動計画が全く連携せずに作られている自治体もありますので、一体化が唯一の正解というわけでもありません。ただ、せっかく同じ地域の将来を考える計画ですので、お互いが連携しないまま進めてしまうのは非常にもったいないことだと思います。

依田委員 社会福祉協議会の地域福祉活動計画と足並みを合わせていくことが重要という話がありましたが、その上で、次期計画の策定に当たっては、社会福祉協議会の地域福祉活動計画ともスケジュールを合わせながら進めていければよいのではないかと考えています。そこで提案ですが、その方向性を今回の計画の中に何らかの形で位置付けることはできないでしょうか。例えば、「次期計画の策定に当たっては、さらなる連携を図りながら、より効果的な計画づくりを進める」といった内容での記載です。必ずしも具体的な方法まで書き込む必要はないと思いますが、将来的な連携の方向性を示しておくことで、次期計画に向けた一定の担保にもなるのではないかと感じています。

事務局 今回の計画でも多様な主体の中に社会福祉協議会を入れていますが、ご指摘のような地域福祉活動計画との連携をどこまで明記できるかについては、ページ数の制約もあり厳しいところです。また、社協との連携については市の計画の中に位置付けられる可能性もあります。

依田委員 中身の連携ができていないと感じています。策定スケジュールそのものを合わせる仕組みがないと、これだけ大きな二つの計画を同時に作り上げていくことは難しいと思います。今期中に実現することは難しいかもしれませんが、例えば次期計画の策定に向けて、早い段階からワーキングを立ち上げるなど、何らかの形で仕組みを位置付けておくことができれば大きな前進になると思います。

事務局 来期の計画策定に当たっては、スタートの段階から社会福祉協議会との連携を見据えながら進めてほしいという点、ご意見として承りました。ありがとうございます。

- (1) ー② 今後の地域福祉計画策定スケジュールについて 資料2を基に事務局より説明。
意見なし

(2) 麻生区地域福祉計画独自ツール（啓発パンフレット）の企画（案）について、資料3を基に事務局より説明した。

佐野委員 この独自ツールについてです。今回は、市の計画と区の計画が一体的に策定される中で、別途作成されるものと理解していますが、このような独自ツールは他区でも作成されているのでしょうか。

事務局 内容はそれぞれ異なりますが、他区においても独自に工夫しながら取り組んでいます。冊子という形ではない場合もありますが、一定の予算を確保し、それぞれの区に応じた独自の取組を進めています。

依田委員 この独自ツールについて、現在どのようなスケジュール感で進めるのでしょうか。案がいつ頃まとまり、その後どのような形で配布されるのか教えてください。市民説明会の段階では完成しているのでしょうか。

事務局 スケジュールについてですが、最終的な発行時期は3月を予定しています。配布は4月以降になる可能性もありますが、まずは3月までに冊子を完成させるスケジュールで進めています。市民説明会は12月ですので、その時点では未完成です。2月のこちらの推進会議の際に案として提出できればと思います。また、先ほど区計画は16ページという限られたページ数のお話をしましたが、今回作成する独自ツールには、その不足を補完する意味もあると考えています。委員の皆様には様々なご意見をいただいておりますので、計画に載せきれない意見についてはこのツールに反映させて進めていければと考えています。

村井委員 今回の独自ツールを、どのように計画を補完する仕組みとして活用し、実効性のある区民の活動へと発展させていくのかが重要になると思います。言い換えれば、この独自ツールにはアクションプラン的な要素や戦略的な視点も必要なのではないかと思っています。単なる情報提供のための冊子なのか、それとも計画を具体的な行動へとつなげるためのツールなのか。その存在意義を明確にした上で作成していくことが大切です。誰に届けるのか、誰の手に渡るのか、そして受け取った人にどのような行動変容を促したいのか。読み手を十分に意識した上で、最も効果的な形にデザインしていくことが重要だと思います。以上です。ありがとうございました。

(3) その他

- ・植木委員より参考資料を基に、「AIはシニアの味方、活用ガイド展」の報告と「人生100年時代をポジティブに」の紹介がなされた。

(事業紹介)

植木委員 前回の会議でご紹介した「AIシニア活用ガイド展」を、8月17日から26日まで区役所ロビーで開催いたしました。開催に当たり、地域ケア推進課の皆様には多大なるご協力をいただき、感謝申し上げます。会期中は多くの方にご来場いただきました。特に最終日に開催した講座は、定員50名に対して100名近い申込みがあり、当初は会議室1のみを使用する予定でしたが、急遽会議室1・2を使用して対応し、多くの方に受講いただくことができました。このことから、AIに対する区民の皆様の関

心の高さを改めて実感したところです。また、この活動はタウンニュース麻生区版にも取り上げていただきました。資料の最後にも記載しておりますが、私たちの活動のポイントは、「AI は適切に活用すれば、シニアの楽しみや可能性を広げる道具になる」ということです。高齢者が AI だけと向き合うのではなく、AI を活用して作成した作品を持ち寄ることで、人との交流が生まれます。だからこそ、AI を活用できるシニアを増やしていきたいと考えています。活用の広がりの一例として、ご紹介したい事例があります。ある高齢者施設では、利用者の方々が手作りの人形を制作するサークル活動を行っています。その人形の写真を AI で動かしてみたところ、「自分が作った人形がこんなふうに動くんて」と、大変感動されていました。このように、AI は高齢者の生きがいや喜びにつながる可能性を持っています。ここにお集まりの皆様も高齢者と接する機会が多いと思いますので、そのような活用方法があることをご理解いただければ幸いです。また、展示会のシニア活動を撮影した職員の方が、その写真作品により社会福祉協議会賞を受賞されました。大変喜ばしいことだと思っています。私自身、最近麻生区でも AI 活用の流れが少しずつ生まれてきていると感じています。社会福祉協議会、地域みまもり支援センター、企画課などが、縦割りではなく横に連携しながら何か取り組むことで、さらに面白い展開が生まれるのではないかと思います。例えば、レストラン麻生の跡地に新たに整備されたフリースペースがあるが、そのスペースの壁面が寂しいので、そこにこうした作品や活動成果を展示してはどうかと考えています。私たちが作成した 50 枚の展示パネルは、すでに行政へお預けしておりますので、ぜひ活用いただければと思います。平均寿命日本一の麻生区らしい取組にもつながるのではないかと考え、ご提案させていただきました。続いて、「人生 100 年時代の学び」講座についてご紹介します。10 回連続講座として実施している本講座も、残すところあと 4 回となりました。毎回多くの方にご参加いただいております、企画した立場として大変うれしく思っています。前回は、高齢・障害課の職員の方に、川崎市の高齢者支援に関するさまざまな情報をご紹介いただきました。市には大変有益な資料が数多くありますが、意外と知られていないものも少なくありません。そうした資料をもとに、分かりやすく解説していただき、参加者の皆様からも大変好評でした。明日は、先ほどから話題にもなっている認知症をテーマに、おれんじあさお共同代表の倉石氏からお話を伺う予定です。私は以前、「まだ認知症にはならないから、今は勉強する必要がないのではないかと話したことがありましたが、その際に「認知症になってから勉強しても遅いのですよ」と言われ、なるほどと考えさせられました。そうした思いから今回の講座を企画しましたが、おかげさまで定員を上回る参加申込みをいただいています。また、10 月は今回の連続講座のメインテーマでもある終末期医療について学びます。人生 100 年時代を迎え、80 歳以降をどのように生き、どのように人生の最期を迎えるのかは、多くの方にとって重要なテーマです。今回は、大塚副所長にご登壇いただくほか、たかはし在宅クリニックの高橋院長にもお話を伺う予定です。実際の医療現場での経験を踏まえた貴重なお話を聞くことができるものと、楽しみにしています。11 月までの残り 4 回についても、すでに定員を上回る申込みをいただいています。それだけ麻生区の高齢者の皆様、これからの人生をどのように過ごしていくのかについて真剣に関心を持っている証であると感じています。こうした取組が今後も継続され、行政にも引き継が

れながら、さらに多くの高齢者の学びや生きがいがいづくりにつながっていけばと思っています。以上、紹介でした。

吉松委員 今のお話を伺い、大変素晴らしい取組だと感じました。麻生区は男女とも平均寿命が日本一となりましたが、その理由を一言で説明することは難しいと思います。しかし、日本一になった麻生区に、このように学ぶ意欲が高く、活気のある高齢者が多くいることを積極的に発信していくことは、大変意義のあることだと感じました。お話を聞いて感動しました。ありがとうございました。

- ・次期の公募委員の募集について事務局より説明。

3 閉会

14 時 55 分閉会 （次回は令和 9 年 2 月 5 日（金）13 時～ 麻生区役所第 2 会議室）